様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　15　日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520445
研究課題名（和文）　現代中国における満洲族・錫伯族の言語と民族意識に関する実証的研究

研究課題名（英文）　A Demonstrative Study of Languages and National Consciousness of the Manchu and the Sibe in the Present-day China

研究代表者
山崎　雅人（YAMAZAKI　MASATO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00241498

研究成果の概要（和文）：
三年に渡る研究計画により、本研究の当初の目的である実証的研究の基礎となる中国・東北部、華北地方、新疆ウイグル自治区での現地調査を予定通り各一年ずつ実施することができ、現代満洲語および錫伯語教育の現状を確認する基礎的資料とされる初等教育教材を入手することができた。これらを比較することで、今日の少数民族語が置かれた危機言語としてのこれら両語の位置づけに関して、考察を行うことができた。また、北京の中国社会科学院図書館では清代満洲語文献のうち、研究対象としていまだ未着手の『満蒙消遣』と『満洲繙論』を電子資料化することができ、文語研究の一資料とすることができた。

研究成果の概要（英文）：
Through the three-year research project, the field work was executed in the Northern-East provinces, Huabei region and Xinjiang-Uighur region. The researcher managed to obtain the basic materials of primary education for the Manchu nation and the Sibe nation. In addition, the literature of Chin dynasty – *Manmeng Xiaoqian* and *Manzhou Fanlun* was investigated and recorded as electronic data at the library of Chinese Academy in Beijing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：満洲語文語、錫伯語、危機言語、民族語教育

１．研究開始当初の背景

言語は、しばしば民族的精神のよりどころとされる。それでは、民族固有の言語を喪失もしくはそれに瀕した場合、その民族意識はどのように保持されるのであろうか。本研究は、満洲族と錫伯族のそれぞれの民族語を対象に考察し、この点に関する、ひとつのケー

ススタディを確立する試みである。すなわち、本研究は、文語研究の成果を踏まえて、今日中国東北部で実施されている現代満洲語教育と、新疆での錫伯語教育を関連づけて分析するとともに、そこに民族意識との関わりを実証しようとする点で、これまでにない、特色ある研究を企画した。

いわゆる「大言語」においては、民族アイデンティティのよりどころとして、言語は不動の位置を占めているため、敢えてその存在意義を問うことは多くないと考える。ところが、少数民族で圧倒的多数の話者人口を擁する異民族に取り囲まれている状況では、民族精神自覚の手段として固有の言語に関心が払われる。こうした民族固有の言語と民族意識の関係に対する再考を促すという点で、満洲族と錫伯族が置かれた現況は、格好の研究対象と考えられる。調査の実施にあたっては、両言語の話し手が減少もしくは存続の危機に瀕しているという現状を鑑み、言語とそれを話す者のアイデンティティの関わりが、固有言語をほぼ喪失した、または多数の異言語間に置かれた中で、年少の世代へ民族意識がいかに伝達されようとしているかという面で満洲族と錫伯族を捉え直す視点に立った。

それにより、中国東北三省の満族自治県、河北省の満族自治県、さらに新疆ウイグル自治区のチャプチャル錫伯自治県での民族言語教育の実態を調査することで、中国の言語政策の現況を知ることができると考えた。

以上のような問題意識に基づき、本研究は中国で実施されている民族語教育としての現代満洲語および錫伯語教育の根底にある民族意識を比較考察するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、年度ごとに一定の地域を対象として現地調査を行い、現在進行中の民族語教育の実態に関する情報収集を行い、そこに民族意識の一端を見て取ることである。

それぞれの地域で、上記の目的を果たすための課題は、以下の三点であった。

(1) 現代満洲語および錫伯語の初等教育はいかなる状況にあり、どのような教育目標を担っているか。

(2) 言語喪失もしくは危機言語にあるとされる現状をどのように実証するか。

(3) 民族意識は言語以外のどこに見出せるか。

あわせて、中国の満洲族文化研究者はどのような最新の研究に従事しているかについても、情報収集を行うことを目的とした。

３．研究の方法

初年度は中国東北部の満洲族を対象とする初等教育の教材を収集し、さらに中国で市販された音声資料付き満洲語会話書を比較資料として入手した。満族自治県において民族教育としての満洲語がどこまで教育されているかを明らかにするための現地調査を行い、あわせて黒竜江省満語研究所の趙阿平氏との情報交換を行った。

二年目は、満洲族が数多く居住している北京及び河北省の満族自治県で満洲語教育に関する実態調査を行った。その際は、北京社会科学院満語研究所を調査の拠点とした。あわせて同所主催の清代文化研究会で中国の研究者との学術交流を行った。

三年目は、新疆の錫伯自治県の民族教育の状況と母語話者に対する調査を主に行った。あわせて、吉林省の長春師範学院で大学レベルの満洲語文語教育を観察し、イリ師範学院で学術交流を行った。

以上の方法から本研究で明らかにしようとすることは、初等教育における民族意識の反映を現地で用いられているテキストの分析から実証的に行うことであった。すなわち、

言語学習教材としてどのような言語体系を目標とし、その学習動機にどのような歴史意識を掲げているかを分析する方法である。

４．研究成果

（１）初等テキストと市販会話書の比較

遼寧省撫順市新賓永陵満族自治県の満洲語テキスト（以下新賓テキスト）は、近年の満洲語教育の高まりに先駆けてつくられたもので、その実態は文語を基礎としながら、音声と文字に関しては、そこからの逸脱が見られるなどの特徴が見られる。他方、吉林省長春の東北師範大学満語言文化研究中心編の伊通テキストは、歴史文化編を先に掲載し、言語編を後に入れることで、最初に民族意識を歴史事実の共有から喚起させ、言語学習の動機にすることを意図していると見られる。前者が、文字と語彙、例文の羅列に終始しているのに対して、後者は、色刷りであり、練習問題を文学作品から取るなど、初等学年の対象者により向学心を喚起するように工夫されている。また、文字学習も、前者の新賓テキストは最後まで満洲文字とそのローマ字転写を併記しているのに対し、伊通テキストは語例にはイラストや写真で視覚的に対象物が示され、その下にローマ字表記と満洲字母表記があるが、漢語が一切ないことである。このローマ字表記も子音の課が始まるとなくなっている。できるだけ満洲字母になじませて満洲語を理解させようとの工夫であろう。これらの差異から、初学者向け満洲語テキストが数年を経て、長足の進歩を遂げたことが分かる。また、これらの教材を使用する側も、新賓テキストは、永陵の満族小学一校であるのに比べて、伊通テキストはどの初等教育でも使用されることを前提に編纂されていることが分かる。満洲字母のフォントも、手書きのコピーである新賓テキストに比べ、活字の中でも手書きに近い形態が採用されており、市販の満洲語テキストの活字体とはかなり異なるフォントである。

母音字母のローマ字表記において付加記号を要する ū には、v があてられている。これは本書の発行元である東北師範大学満語言文化研究中心独自の表記だが、できるだけ汎用性のあるアルファベット記号でまかなうための工夫であろう。

中国滞在中に入手した市販の会話テキストが『満語 365 句　一天一句学満語』(2009) である。これまで見た初等教育用テキストと比較すると、体裁では日常会話集として、従来の同類書と同じく満漢対置の形式を取っているが、目新しいところは CD 付きであることである。書名に「満語」と掲げてはいるものの、音声はチャプチャル錫伯自治県の錫伯語話者が録音したもので、いわば満洲語文語の綴りを錫伯語音で読んだものであろう。ここに、東北の満洲族と新疆の錫伯族が言語を介して接近する状況が見て取れる。

本書では、満文が初めに書かれ、その右側のローマ字表記は、両者を平行にするため、90 度転回している。一番左側に対訳中国語文がある。これまでに見た初級用テキストの二書は地の文などがいずれも横書きであったのは、ローマ字表記となじみやすく、小学生もすでに横書きの中国語文でそれになれているからであろう。したがって、縦書きをあえて採用している本書は、満文もしくは錫伯文を優先していることになる。もっとも、伊通テキストでも短い会話例は縦書き満文で書かれているが、ローマ字表記は個々の単語の脇に横書きで添えられているため、一文がかなりのスペースを要している。復習課などで出される長い文は、ローマ字表記のみになっている。

活字の満洲字母を採用しているのは、本書の使用者は専ら満文を目で確認しつつ音声

に慣れることを学習目標とし、満文を綴ることは意図されていないと考える。ロールプレイのように、日常生活のさまざまな状況での言語使用例を習得するうえでは、まず音声情報と視覚情報を合致させることが目的で、自ら書き言葉で発信する段階ではないということであろう。ここが個人での使用を前提とする本書と、学校教育で用いられる先の二テキストの違いである。

また、初等教育用の二書は文字を書くことも学習者の課題に入れていると思われるが、音声資料が付属した市販書は、一般の学習者が例文暗唱に用いるのに適している。いずれも細かな文法事項の説明はなく、短い会話を初歩段階から身につけさせることを目的にしているように思われる。実用的な語学学習ではこうした短文を記憶する方法が取られるが、文法の理解をどこで導入するかがさらに学習を継続できるかの分かれ目になるであろう。

（2）新賓テキストの分析

本書は、新賓で暮らす満洲族の子弟が、職業や地元の生産物を通して、身近に感じられる例文を工夫していることが分かる。その反面、満洲語テキストとして汎用性があるとは言えないだろうが、本来が「校本教材」と称している以上、地域の特性を取り入れているのも、自然であろう。

語法面を見ると、動詞の形態については、一年級の第一課から命令形と希求法形が出ているが、これらは挨拶表現として固定した語形であり、文法的に解説されるものではないであろう。その後、対話で聞き手に動作を勧めるときには、動詞語幹の命令形ではなく、希求法動詞接辞-ki を多用している。六年級では特定領域の語彙を集中して学ぶ配慮があることは評価できるが、いかんせん量的にはかなり限定されており、これだけでは実用性は十分とは言えない。完了形と未完了形の相違や副動詞-fi と-me の時間性における対立といった文法的概念を学ぶための例文としては、配慮が特になされている訳ではないと考えられる。それがこのテキスト言語篇の問題点であろう。試行本として作られた観が否めない。

最後の記述が郷土の歴史文物であることから分かるように、歴史文化編のテキストは満洲族文化の記述としながら、一方で清朝の事績を追い、他方で新賓の郷土色を記述しているところに、満洲族子弟を対象とする民族教育のひとつの型が見られる。言語篇もそうであったが、他の満洲語学習教材に先行する時間的制約のもとに使用者である永陵小学の子弟を対象者に限定して作成された学習教材である点が、良くも悪くも本書の特徴であろう。

分量のみならず、記述の水準からして言語篇よりも歴史文化篇に重きが置かれていることは明瞭である。満洲族の子弟に歴史と文化を共有することから民族意識を維持することを目指しているが、言語を復興する意図があるとは思えない。ただし、漢語を母語とする者が大半を占める満州族の現状からして、まず歴史意識に民族色を投影し、ひいては満洲語に関心を持つ者を拾い上げていこうという意図は長期的戦略としては当を得たものと言えよう。

上述の三課題について、本研究による現時点での見解は以下の通りである。

(1) 現代満洲語および錫伯語の初等教育状況および教育目標に関しては、テキストの分析により明らかにすることが可能である。

(2) 言語喪失もしくは危機言語の現状は、初等教育のテキストに実証される。

(3) 言語以外の民族意識の出現は、歴史文化記述の対照研究から実証される。

今後の展望は、これまでの東北地区の現代満洲語教育を基礎とし、新疆のチャプチャル自治県での錫伯語教育との比較を通した考察を行い、本研究の集約段階へと進めて行く考えである。これと合わせて、北京の中国社会科学院図書館所蔵の清代満洲語文語文献の研究を遂行する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 山崎雅人「モンゴル語の認識動詞」『言語情報学研究』第 6 号、23-38、2010 年、査読なし
② 山崎雅人「現代中国における満洲語学習教材比較研　東北地区の初等テキストを中心に」『言語情報学研究』第 7 号、13-28、2011 年、査読なし
③ 山崎雅人「現代中国における満洲族と錫伯族の言語と民族意識について（１）―初等教育語学教材とインターネット上のサイトの比較から―」『言語情報学研究』第 8 号、16-27、2012 年、査読なし

〔学会発表〕（計 2 件）
① 山崎雅人「満洲語文語における動名詞述語構文の情報機能」2009 年 11 月 28 日、神戸大学、日本言語学会第 139 回大会
② 山崎雅人「近年における中国東北部の満洲語教育」多言語社会研究会第 58 回例会、2012 年 1 月 29 日、東京外国語大学本郷サテライトセンター

６．研究組織
(1)研究代表者
山崎　雅人（YAMAZAKI　MASATO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00241498

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし